

## 第40回日本毒性学会 研究発表のご案内

< ポスター発表 >

ポスター 6月17日(月) 16:00 - 17:00 ポスター会場

演題番号: P-50 山縣 広

演題名: フローサイトメトリーによるラットの赤血球内変性ヘモグロビンの定量分析に関する検討

概要:

Heinz 小体は、先天性疾患の他、酸化作用のある化学物質の暴露により、赤血球内で変性ヘモグロビンが沈殿して形成されます。Heinz 小体陽性率は、変性ヘモグロビン生成の指標として、ヒト及び動物の臨床診断に利用されています。ヒトでは変性ヘモグロビンの新規分析法として、フローサイトメトリーを用いた赤血球の自然蛍光検出による変性ヘモグロビン陽性率の分析法が有望視されており、ラットを用いた毒性試験への適用が可能か検討しましたので報告いたします。

上記発表は優秀研究発表(セッション3 6月17日(月) 9:00 - 11:30)にも含まれております。

ポスター 6月18日(火) 16:00 - 17:00 ポスター会場

演題番号: P-111 福村 加奈子

演題名: ウサギの胃における毛球形成 - 生殖発生毒性試験における意義及びその変動 -

概要:

胃における毛球形成の意義及びその変動を調べることを目的として、Kbl:NZW ウサギを用いた約20年間の生殖発生毒性試験データについて、毛球貯留動物数の実態を調べると共に、調査期間を3区分(1993~2000年/2001~07年/2008~11年)に分けて比較しましたので報告いたします。

演題番号: P-116 増淵 康哲

演題名: rasH2 マウスの短期(26週間)がん原性試験における背景データについて(2)

概要:

第38回日本トキシコロジー学会学術年会(2011年)で報告しました1ロット分(雌雄各50匹)に追加し、3ロット分(雌雄各150匹)の背景データを取得しましたので報告いたします。結果として、背景データ群の自然発生性腫瘍の発現頻度はこれまで報告されている文献と大差はありませんでした。また、発がん陽性対照群(MNU 単回投与)の発がん感受性は4ロットとも良好でした。

演題番号: P-127 里本 健輔

演題名: がん原性試験における Crl:CD(SD) ラットの自然発生性腫瘍 - 特に早期発生腫瘍について -

概要:

Crl:CD(SD)ラットにおける腫瘍の発生時期を把握する目的で、当施設で2003年から2011年の間に実施したがん原性試験22試験の対照群動物における自然発生性腫瘍のデータを集計し、検討を行いましたので報告いたします。

演題番号: P-135 後藤 玄

演題名: リンパ球サブセット検査を用いたラット TDAR 法試験における免疫系細胞の解析

概要:

リンパ球サブセット検査は免疫系細胞の変動を捉えることができ、免疫機能の評価に有用な情報をもたらすことが期待されます。リンパ球サブセット検査を TDAR 法試験とともに実施することにより、免疫抑制作用による抗体産生能の変化とそれに伴う免疫系細胞の変動についていくつかの知見を得ましたので報告いたします。

演題番号: P-194 (弊社研修生による 所属:東京農工大学、岐阜大学大学院) 八舟 宏典

演題名: ラットを用いた様々な発がん標的臓器での発がん促進時早期における細胞周期分子の発現特性

概要:

これまでに、発がん標的性の異なる発がん物質をラットに28日間反復投与した際に発現変動を示す細胞周期分子の探索により、標的臓器を問わず、高い細胞増殖活性を示す発がん物質で特異的に反応する分子、また、標的臓器により異なる反応性を示す分子を見出して参りました。今回、異なる発がん標的に対する発がん促進過程早期におけるこれらの分子の反応性を検討しましたので、報告いたします。

演題番号: P-198 西原 義人

演題名: ポリアクリルアミドゲルディスク電気泳動法による

モルモットの血漿アルカリフォスファターゼ(ALP) アイソザイム分析

概要:

アルカリフォスファターゼ(ALP)は臓器障害時に血中へ逸脱し、血漿中の活性を上昇させることから、一般毒性試験で頻繁に測定されています。アイソザイム分析は有効な手法ですが、実験動物では分析法が十分に確立されていません。マウス、ラット、ウサギ及びイヌについては過去に検討した結果を報告しました。今回、モルモットの血漿ALPアイソザイムについても同様に検討しましたので、報告いたします。

(以上、全て筆頭発表者のみ掲載)



株式会社

ボゾリサーチセンター